

研究ノート

女性と知識(2)*

森 川 甫**

リンダ・ティンメルマンス著『女性の教養へのアプローチ(接近)(1598-1715)』¹⁾の序論のなかで、「ルネッサンス期における女性の知識へのアプローチ」について、著者は次の3項目、—1. 女性論と女性の知識へのアプローチの問題、2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ、3. 女性教育に賛同する運動、16世紀の賛成論の限界と展望—によって問題を提起している。『社会学部紀要』第78号²⁾において、「1. 女性論と女性の知識へのアプローチの問題」をとりあげたが、本号では、「2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ」³⁾を扱う。

2. ユマニズムと宗教改革、および、女性の知識へのアプローチ

ユマニストたちと宗教改革者たちの提案は女性のチャンピオンたち⁴⁾の提案と異なり、しばしば抽象的なものではなく、より細心の注意を払った提案であると言えるが、女性自体がユマニストたちと宗教改革者たちの中心的な関心事であったのではなく、彼等が女性の教育の問題に取り組んだのは、彼等の大きな関心事の多くが女性問題に関連していたからである。すなわち、彼らの関心は聖書の本文を信徒大衆に伝えること、また、結婚を再評価することであり、これらのテーマは福音

的ユマニズム、宗教改革、プラトニズムに共通したテーマであった。

女性の宗教的教養

福音的ユマニストたち、少しのちには、宗教改革者たちが主として努力を払ったのは、唯一の源泉である聖書、ことに、新約聖書をとおしてキリストの教えを再発見することであった。ところで、エラスムス⁵⁾の表現によるこの「キリスト教哲学」はすべての人々にとって近づくことが可能であった。「それはいかなる年齢、性、財産、身分の人々をも排除しない」ものであった。

多くの点で、革命的なこのアピールは、エラスムスが教養の民主化に賛成であったことを意味するものではない。確かに、聖書は「無知な人々」にも、貧しい「単純な女性」たちにも啓示されるかも知れない。しかし、それはキリストの哲学が「三段論法よりも直観にあり」、「議論よりも生命であり、学識よりも靈感であり、推論よりも回心である」からである。高い教育は必要ではなく、「信仰を持つこと」が肝要であって、少数者にすぎない「学者になること」が重要なものではない。しかし、福音主義はその外見にもかかわらず、男女信者の大多数の宗教教育に関しては、民衆の低いレベルに合わせることを目指してはいなかった。

アピールが投げかけられると、宗教改革者たち

*キーワード：女性、知識、教育

**関西学院大学社会学部教授

1) Linda TIMMERMANS, *L'accès des femmes à la culture* (1598-1715), 1993, Edition Champion, Paris, 941 p.

2) 関西学院大学社会学部研究会、1997年10月発行。

3) L. TIMMERMANS, *op. cit.*, pp. 28-41.

4) クリスチーナ・ド・ピザン、ル・フランなど。Cf. 研究ノート「女性と知識」(1)『社会学部紀要』第78号。

5) Desiderius ERASMUS (1466-1536) ロッテルダム生まれのユマニスト。神学をスコラ哲学から解放し、聖書、教父などの信仰を探究し、人文主義的思想を確立しようとした。

がそれを受け入れた。プロテスタントの宣伝文書は民衆語で書かれ、女性たちが聖書を読む権利を熱心に擁護した。多くの女性たちにとって、プロテスタントに加入することは、なによりも、知的生活へのアピールであったと、ナタリ・ゼモン・ダヴィは明示している。⁶⁾ ピカルディ出身のマリ・ダンチェールはその輝かしい例である。『極めて有用な書簡』において、宗教改革に参加したこの元修道女はただ単に、女性の聖書へのアプローチを求めているだけでなく、女性たちが宗教問題を取り扱う権利、あるいは、一彼女は女性が集会で説教することが許されていないことを知っていたので、一少なくとも、互いに忠告し、聖書について書く権利を要求した。⁷⁾

『書簡』のなかでマリ・ダンチェールは「まず第一に願っていることは、真理を知り、聴くことを望んでいる貧しい女性たちに語りかけることである。」と書いている。ジュネーブでは、実際、彼女はカトリック教会に忠実なクララ修道会を改宗させることを他のユグノーの女性信者とともに努めた。彼女は「説教した」とクララ会のジャンヌ・ド・ジュシーは憤慨している。⁸⁾

マリ・ダンチェールが説教に加わった唯一のプロテスタント女性信徒ではなかった。ジャーヌ・ガリソンは次のように述べている。「み言葉への自発的なこの参与は、ただちに、障害にぶつかった。」1560年、大会と地方教会会議の決定事項、すなわち、女性は「公の場で、読むことも、祈ることもしてはならない。」「洗礼を受けることも許されていない。」⁹⁾ である。カルヴァンやヴィ

レ、また、他の多くの宗教改革者も、女性が説教をし、教えることを厳しく禁じた。¹⁰⁾

カトリック教徒は一致して、プロテスタント女性信者の聖書と神学への好奇心を非難した。ロンサルは『フランス民衆への忠告』において、一般的な意見を次のように述べている。「家事をし、家を守らなければならない女性が空しく福音書の積み明かしをする時、私は残念な気持ちでいっぱいである。」¹¹⁾

モンテーニュによれば、「女性は神学に関わるのは全く適していない。」¹²⁾ しかし、ロンサルにしても、モンテーニュにしても、女性の増大する宗教的好奇心をせき止めることができなかった。17世紀には、カトリックでさえ神学や論争に関わる問題を扱うことを躊躇しなくなるのである。

結婚と訓育

パウロの教説の名のもとに企てられた結婚の復権は、福音主義者や宗教改革者によって、エミール・V. テルが考えているように、ただ単に積極的だけでなく、女性の身分と観念に関して、重大な結果をもたらした。我々が関わっている領域では、とくに、そのことが感じられる。¹³⁾

2人のユマニストが私達の注意を引く。¹⁴⁾ エラスムス¹⁵⁾とスペインのユマニスト、ホアン・ルイス・ヒーヴェス¹⁶⁾である。エラスムスは福音主義の結婚観を最も完全に、そして、最もよく整理して、『キリスト教的結婚教育』¹⁷⁾を著し、ヒーヴェスは、『キリスト教的女性教育』¹⁸⁾を書いた。エラスムスとヒーヴェスは教育的な目的を追求した。

6) Natalie Zemon DAVIS, *Cultures du peuple*, p. 130.

7) Marie Dentièrre, *Epistre tres utile faicte, dans la Corr. des réformateurs*, Genève-Paris, t. V, 1878, pp. 295-304.

8) J. Jean de JUSSIE, *Le Levain du calvinisme, cité Les Réformes*, p. 242.

9) GARRISSON-ESTERE (J), *L'Homme protestant*, Hachette, 1980, p. 153.

10) Cf. BIELER (A), *L'Homme et la femme dans la morale calviniste*, Genève, 1963, pp. 77-78.

11) RONSARD, *Discours des misères de ce temps*, Genève, 1979, p. 133.

12) MONTAIGNE, *Essais*, I, XXV, p. 140. Ed. de VILLEY.

13) Emile V. TELLE, Cf. *Mariage d'Anglème*, p. 316 et passim.

14) Cf. MARGOLIN (J.-Cl.), *Histoire mondiale de l'éducation*, PUF, 1981, t. II, pp. 181-186.

15) LA GARANDERIE, M. M. de), "Le féminisme de Thomas More et d'Erasmus" *Moreana*, n° 10.

16) KAUFMAN (G.), "Vives on the education of women" *Signs*, t. 3, n° 4, (1978), pp. 891-896. Juan Luis VIVES (1492-1540) スペイン、ルネッサンス期の人文主義者、エラスムスの友人。

17) *Institutio christiani matrimonii* (1525)

18) *Institutio foeminae christianae* (1524)

女性の知識へのアプローチの分野では、福音主義の結婚観とユマニズムの教育観は協力した。エラスムスにとっては、実際、結婚が合法的であり、望ましく、快適であることを証明するだけでは十分ではない。良い結婚の条件を解明し、結婚の規律を示し、夫婦を教育し、彼等の結婚を成功させなければならなかった。

ところで、結婚成功の条件の一つは、花嫁の訓育である。それは結婚前に始まる。ルターによれば、「妻が家事をし、子供をキリスト教的に養育する」ためには、娘達のために学校が必要であった。

しかし、ルターはそこに留まる。家庭内における女性の働きの有効性を十分に知っていたとしても、精神の領域における働きを決して彼女に与えなかった。女性訓育の目的では、エラスムスとヒーヴェスはルターと基本的には一致しているが、彼等はさらに前に進んでいる。ユマニストたちが推奨する理想は、まさに、家族の父親 *pater familias* を補佐する家庭の女性 *mulier domestica* である。¹⁹⁾

『キリスト教的結婚教育』の1つ章において、エラスムスは結婚入ることを望む若い女性に適した行動、つまり、織ることと学ぶことをとりあげている。結婚に関しては、知的教育はその一部となっている。「文学は良い教えにより、娘の精神を訓練し、徳を愛させる」とエラスムスは述べている。²⁰⁾ 花嫁は、何よりも第一に、まず徳がなければならない。

エラスムスとヒーヴェスは、16世紀に女性の教育を擁護したすべての人々と同様、女性が知識を得ることにより悪に、より正確には、不道德に陥るという偏見（とくに、ドリュサックの主張²¹⁾）を否認している。もしも男性が「文学の知識」によって善くなるとしたら、なぜ博識が女性の誠実さや徳を損なうのかと、ヒーヴェスはクリスチヌ・ド・ピザンに続いて問うている。1521年9月

の手紙で、エラスムスは彼の友、トーマス・モア²²⁾が娘の教育において遵守している原則をギョーム・ビュデ²³⁾に示している。

「今日まで、ほとんどすべての人々は純潔と良き評判のためには、文学的教養は女性にとって不要であると思っていました。かつて、私自身もこの意見からそんなに離れてはおりませんでした。その考えをモアが完全に追放してくれました。…」²⁴⁾

エラスムスによって要約されている伝統的な推論や彼の反駁に対して17世紀は何物も付け加えないであろう。女性の敵も味方も、彼等の陣営に留まっている。ビュデ宛ての手紙のこの一節は、モリエールの『女房学校』²⁵⁾のような戯曲やスカロンの『無益な用心』²⁶⁾のような小説の萌芽を宿している。

知識は女性を不道德に導くと幾度となく主張した先人たちに対して、ユマニストたちは知識は徳に導くという彼等のお気に入りの主題の一つを女性に適用することを躊躇しなかった。しかしながら、知識と女性との間に伝統的に打ち立てられた紐帯を廃止はしない。彼等はそれをただ逆にした。というのは、徳は女性にとって特別な意味を持っているからである。つまり、徳は純潔や羞恥と同一視される。女性の知識探究が向かわなければならないのは、なによりもこの徳である。

娘たちにとっては、羞恥心を保持するには、学習以外、何物も有用ではない。少なくとも、学習がうまく用いられるならば、「良俗を教え、生活を整え、良識を教え、カトリック教徒として生きることを教える知恵の学習」のみに、女性は専念すべきであとヒーヴェスは確言する。

良俗の腐敗でしかない「恋愛」とか「戦闘」の書物は女性には禁止されるべきである。しかし、「良い模範や賞賛すべき話を読むこと」によって、悪徳を憎悪させ、羞恥心、純潔、その他

19) MACLEAN (I.), *Renaissance notion of woman*, pp. 56-60.

20) ERASME, *Le Mariage chrétien*, p. 107.

21) Cf. 研究ノート「女性と知識」(1)『社会学部紀要』第78号、

22) Thomas MORE (1478-1535) イギリスの政治家。

23) Guillaume BUDÉ (1467-1540) フランスのユマニスト。

24) ERASME, lettre à Budé, traduite par M. M. de LAGARANDERIE.

25) MOLIÈRE (1522-1673) *École des femmes*

26) *La Précaution inutile*

の徳を願わせるであろう。ヒーヴェスはとくに、聖人や教父の伝記を推賞している。²⁷⁾

女性たちが神学的、哲学的知識を深めたり、また、修辞学や「法学」、論理学を学ぶことはなおさら必要としない。それらはモンテーニュが言うように、「彼女等には必要のない非常に空しく、不用な薬である。」²⁸⁾

こうした女性訓育は、娘たちを若者の軽薄な話に耳を傾けることから逸らせる。ヒーヴェスによれば、「読書に養われた知恵を持つ心は、奢侈を嫌悪するだけでなく、ダンスや歌やふしだらな遊びのような、生娘の精神を損なう多くの小さな、軽い快樂の思いを拒絶するだろう。」²⁹⁾ そのうえ、読書は暇や「良俗を腐敗させるもの」に対する最良の薬なのである。この点に関しては、とくに、エラスムスが強調している。

エラスムスにはもう一つの主題がある。すなわち、夫は妻の「家庭教師」という主題である。「もしも彼女たちに学識がないならば、夫に教えられなければならない。」とヒーヴェスも言うが、エラスムスはこの考えをさらに詳細に展開するだろう。彼にとって問題は、良い結婚の秘訣を与えることである。「ところで、妻の気持というものは、結婚の結びつきを養うのに大いに貢献するから、夫が彼女の行為をよく教育することは肝要である。…彼女は夫が望むような妻となる。それゆえ、結婚前に、性質がおとなしく扱いやすい女性を選ばなければならないし、同様に、結婚後、夫が持たなければならない第一の、基本的な配慮は、妻の心を育て、福音書の教訓を教え、少しずつ、敬虔さと徳を愛するように導くことである。」³⁰⁾

プロテスタントも妻に対する夫の義務を同様に考えるだろう。夫は彼女を教育し、良俗と真の宗教に導くだろう。道徳的、宗教的な教育を別にして、エラスムスも文学的指導でもあり、精神と判

断力の養成でもある知的教育を予見している。夫は妻にラテン語とギリシャ語を教え、良い読書をするように彼女を教え、妻が説教を理解し、心にとめ、「物事を正しく判断する」ように導く。³¹⁾ 夫によるこの訓育は必須である。「夫の健全な協力なくしては、妻は何一つ完全なことはできないので、また、もしも夫が妻の精神を育てることを、また、妻に健全な感情を吹き込まなかったら、何が期待できようか。」³²⁾

ヒーヴェスに関して、エヴリーネ・ペリオールヴァドールは次のように書いている。「男性の介入は決定的である。」「要するに、腐敗のあらゆる危険を避けるためには、男性は女性と知識の間の仲介者として現れる。」³³⁾ 女性は自分自身で何かを知ることができるか買いかぶることができないし、自立的に教えられることもできない。そのうえ、女性は黙らなければならない。聖パウロは教会内では語らないよう女性に禁じたではないか。「彼は彼女たちに集会で話すことを許可しなかった。しかしながら、家で学ぶために話すことは妨げなかった。しかし、夫の上に立つことは全く許さなかった。」とはいえ、もしも夫が教える務めを心に留めているならば、起こってくることには、何の危険もない。というのは、花婿と花嫁の間に立てられるのは、教師と生徒の関係であるので、一方の優位性と他方の従属を強調するだけでなく、夫は妻が喜んで従うことを教えるからであり、夫の訓育の果実は敬虔さ、羞恥心、謙虚、また、服従と愛など多様だからである。

もしも、エミール・V. テルとともに、エラスムスにおいては、結婚愛がある程度、女性愛をひき起こすことができるというならば、(エラスムスは花嫁に尊敬、思慮、訓育を求めている。) 昔のフェミニズムより進歩しているという意味ではない。³⁴⁾ フェミニズムについて語らなければならないとしたら、それは「父権的フェミニズム」であ

27) VIVES, *Femme chrestienne*, p. 36.

28) MONTAIGNE, *Essais*, III. iii. p. 822.

29) VIVES, *op. cit.* p. 38.

30) ERASME, *Mariage chrétien*, p. 234.

31) *Ibid.*, p. 235 et p. 237.

32) *Ibid.*, p. 237.

33) BERRIOT-SALVADORE (E), *La Femme en France*, p. 68.

34) TELLE (E.V.), *Déclamation des louenges de mariage*, p. 204.

ると言わなければならない。ユマニストたちが、女性には悪魔的生物がいるので悪を犯さないようにするため、無知の状態に留めておかなければならないとするアンチ・フェミニズムと全く断絶していることは確かである。しかし、彼らにとっては、宗教改革者たちにとってと同様、女性教育は結婚と夫に向かわなければならない。少女の教育は、結婚において必須である徳への適合に限定される。花嫁はその文学的、道徳的、宗教的形成をその夫に負っている。

エヴリーヌ・ベリオ・サルヴァドールによれば、ユマニストの教育は二重の目的を追求しているように思われる。つまり、女性が家族を守る柱となることと、「学識」ある女性が服従に同意する当事者となることである。「ブルジョワ」家庭が栄えると、家庭の価値が増し、この家庭をよく治めることが必要となり、女性の教養の水準を全体的に発展させる。

女性の自発的協力によって、結婚の階級制度的土台、宗教的、政治的秩序の象徴を強固にすることに関わってくる。女性を有徳な花嫁、家族の母親の役割を果たすようにに養成しなければならない。この理想は、ユマニストたち、プロテスタントたちが女性教育のために提案し、やがて、カトリックの改革者たちが提案することになるものをすべて基礎付けている。

愛と知識

ルネッサンス期のネオ・プラトニアンは女性教育の問題を違った視点から取り組んでいる。彼らの対象は結婚ではなく、愛である。『プラトンの「饗宴」注解』において、マルシヨ・フィチノ³⁵⁾はプラトンに続いて、愛における知的機能の重要性をすでに主張していた。愛は美の願望である。この美は「ただ知性と視覚と聴覚に所属している。」³⁶⁾「この三つの能力」、とりわけ、私達に精神の美を認識することを可能にする知性により、人間は肉体的美から離れ、神的美に達することがで

きる。精神の美は見ること、あるいは、聴くことによって知覚される身体、あるいは、声の美よりも優れており、フィチノは愛と知的認識との結びつきを打ち立てたとしても、それを女性には適用しなかった。フィチノから靈感を受け、しかし、彼のプラトンの愛を男女間の愛に限定して、文学において、女性のために愛の主題、知識の源泉を導入したのは、社交界の著者たちである。ネオ・プラトニックの靈感を受け、フランス文学のなかで例として二つの作品を取り上げよう。架空であれ、現実的であれ、女性の口により女性の表現されているという事実により、その主題が明白である。その二作品とは、アントワヌ・エロエの『完全な男友だち』³⁷⁾とペルネット・デュ・ギユエの『韻律』³⁸⁾である。

『愛について』において、フィチノはプラトンの説に同意して、年下と年上の二人の恋人の間で交わされる「美の交換」を描いていた。後者は「年下の恋人」の身体的美を目で楽しみ、前者はより経験豊かな恋人との親密さにより「知的美」を獲得する。一方は教え、他方は学ぶ。エロエとペルネット・デュ・ギユエが性の異なった恋人たちに適用して、展開しているのは、年下の恋人が年上の恋人により知的に形成されるというこの原理である。年上の恋人は、もちろん、男友だちであり、年下の（そして、最も美しい）恋人は女友だちである。

アントワヌ・エロエとペルネット・デュ・ギユエは、愛と徳と知識の間の密接な結びつきを打ち立てた。女流詩人、ギユエによると、

「知識は徳に仕え、
徳によって不品行な愛は打たれ、
徳は愛を正す。」³⁹⁾

知識によって支えられた徳は「不品行な」（俗な、あるいは、地上的な）愛を真の愛に変える。—フィチノによれば、神へ昇る第一歩である。『完全な女友達』におけるこの変化は全く男友だちによる。彼らの愛の初期において、彼女の感覚は

35) Marsillo FITINO (1433-1499) イタリアのユマニスト。プラトン主義の哲学者。FICIN, *Commentaire sur le Banquet de Platon*, Les Belles Lettres, 1978.

36) *Ibid.*, p. 142.

37) Antoine HÉROËT, *La Parfaicte Amye*

38) Pernette du GUILLET, *Rymes*, Genève, Droz, 1968

39) *Ibid.*, p. 74.

「余りにも地上的なものであり、彼女は身体も精神も同様に考えている。しかし、彼女がこの段階にいる時、男友だちは彼女をプラトニズムとフィチニズムに導くことを企てる。六年経った今、彼女は次のように肯定することができる。「彼が望むすべてのもの、愛が欲求するすべてのもの、聴いたり、あるいは、読んだりすることのできるすべての知識は私の内にある。」⁴⁰⁾「私の行為の著者、読者、証人である男友だちのおかげで」男友だちのなかに女友だちの教育者を認識するように招く美しい表現は、エラスムスやヒーヴェスの願い求めた妻の家庭教師であるネオ・プラトニシアン的な夫に相当する。

この愛の家庭教育に関して、彼女の夫の「高い知識」の前で賞賛を隠さないペルネット・デュ・ギユエは、『完全な女性』ほど明白ではない。『韻律』において、「彼女の男友だちは彼女の教師であり、彼女が模倣しようと努める古代や近代の文学作品の傑作に彼女を導いたのは、彼であった。」とのみ述べている。彼女にとって、「貴婦人の男性に対する従順は生徒の師に対する謙虚さにすぎない。」彼女が彼女の男友だちを精神的師とみなしていることは、とりわけ、ペルネット・デュ・ギユエの好む隠喩に見られる。すなわち、夜、すなわち、闇（無知の象徴）を追い払う光（知識の象徴）である Jour（日）の隠喩である。Jour（日）は彼女の男友だちである。

「私は Journée（昼）、

あなた、男友だちは Jour（日）、

私を不吉な滞在から離し、

私が全く望まない夜を愛することから逸らして下さる。

闇のなかでは不吉なもの以外、

何も見ることができない。」⁴¹⁾

無知は悪徳である。そのことをペルネット・デュ・ギユエは肯定する。アントワヌ・エロエも同様である。二人とも、彼女たちの男友だちが彼女たちの中で悪徳を打ち倒し、その代わりに、知識を導き入れたことを賞賛している。女性に適用される原則は「よく愛し」「無知でない」ことであ

る。実際、愛する女性は、無知と呼ばれることができない。彼女は彼女の男友だちが何を賞賛するか、軽蔑するか、どのようにすれば彼の激昂を鎮めることができるのか、を知っているからである。彼女は彼女の男友だちの望みを常に予見することができる。」彼女は何が彼を苛立たせるかを知っている。彼女の知識は、なによりも、男友だちを知ることにある。エロエは、フィチニアン（そして、プラトニシアン）の理論の助けを借りて、男友だちを通して、女友だちが彼女自身を知るところを説明している。M. A. スクリーチによれば、次のとおりである。

『『完全な女友だち』の愛が神の美の偶然の観相に至るか否かという問題が問われるであろう。フィチニアンの意味では、それは至らない。むしろ、神性が彼女の恋人にやってくる。この恋人が地上では、彼女の真の神となる。彼が死んでも彼女の愛情の中心が彼から神に移ることはない。生きている間、彼はより高い思いを集める。死んだ時、彼はなおも力を振るい、彼女は身振りによって愛情を表し、彼の復活を求めるであろう。もしもこれに失敗したとしても、彼女はより高いものを学ぶであろう。」⁴²⁾ 彼女の恋人が神の右の座に座っていることを条件にしてのみ、彼女は神に導かれる。

エラスムスやヒーヴェスにとっては、女性の知識は結婚にその源泉を見出し、結婚に戻っていると同様、エロエにとって、女性の知識は愛にその源泉を見出し、愛に戻る。女性の教養が決まるのは、男性との関係による。

宮廷生活にネオ・プラトニズムの教説を適応する世俗道徳の論説において、同じ事実が申し立てられている。世俗道徳の領域において最も大きな影響力をもった著者、バルタザール・カスティリオネは『宮廷貴婦人』において、「宮廷の貴婦人」は優雅な話題であらゆる種類の男性と優しく話ができるように、十分に教養を身につけねばならないと主張している。

「…この貴婦人が文学、音楽、絵画の知識を持ち、また、あの密やかな謙虚さと宮廷人に与えら

40) HEROET, *La Parfaite Amye*, v. v. 477-479., p. 15.

41) P. DU GUILLET, *op. cit.* p. 82.

42) SCREECH (M.A.), "Querelle des Amyes", pp. 116-117.

れた他の忠告を彼女が自ら与える良き言葉でもって、ダンスと宴会をすることができるように、私は願う。このようにして、彼女が会話し、笑い、遊び、良い言葉、つまり、あらゆることにおいて良い言葉を用い、出会うあらゆる人にふさわしい冗談を言うならば、彼女は優雅さに満ちあふれるであろう。⁴³⁾ 宮廷においては、「宮廷の貴婦人」は何よりも、飾りの役割を果たす。彼女が快適の技術を学ぶだけでなく、宮廷人と同類の教養に近づくのは、この役割を果たすためである。

ペルネット・デュ・ギユエもまた、彼女の男友だちから知的に解放される意志は全くなかった。彼女は男友だちが知っているすべて、つまり、雄弁、「饒舌、能弁」、文学、哲学を知ることが願うであろう。

「何か高い知識を

見る、そして、

つねに、学ぶ熱心さ。」⁴⁴⁾

この熱心さは、宮殿の貴婦人、あるいは、『完全な女友だち』には、全く未知のものである。それは男性的創作と女性の視点との間の違いの全体である。

それゆえ、カトリーヌ・M、ウィルソンが次のように書いても驚かないであろう。

「それ自体のためではなく、道徳的向上のための手段として学ぶことを強調するのは、男性によって女性のために書かれた教育的論説にほとんど遍在している。」

逆に、「(道徳的目的ではなく) 学ぶために学ぶことの擁護は、女性のペンから来る。受けた教育が提供した新しい自由と自律性に関する幸福感に満ちた熱心な女性たちのペンから。」⁴⁵⁾ (未完)

参考文献

- Linda TIMMERMANS, *L'accès des femmes à la culture* (1598-1715), 1993, Edition Champion, Paris.
- Natalie Zemon DAVIS, *Cultures du peuple*, .
- Marie Dentièrre, *Epistre tres utile faicte*, dans la *Corr. des réformateurs*, Genève-Paris, t. V, 1878.
- Jeanne de JUSSIE, *Le Levain du calvinisme*, cité *Les Réformes*.
- GARRISSON-ESTERE, J., *L'Homme protestant*, Hachette, 1980.
- BIELER, A., *L'Homme et la femme dans la morale calviniste*, Genève, 1963.
- RONSARD, *Discours des misères de ce temps*, Genève, 1979.
- MONTAIGNE, Michel de, *Essais*, Ed. de VILLEY.
- TELLE, Émile V., *Mariage d'Anglême*.
- MARGOLIN J. —Cl., *Histoire mondiale de l'éducation*, PUF, 1981.
- LA GARANDERIE, M. M. de, "Le féminisme de Thomas More et d'Erasmus" *Moreana*, n°10.
- KAUFMAN, G., "Vives on the education of women" *Signs*, t. 3, n°4, (1978).
- ERASMUS, Desirius, *Institutio christiani matrimonii* (1525)
- VIVES, Juan Luis, *De Institutio foeminae christiana* (1524)
- MACLEAN, Ian., *Renaissance notion of woman. A Study in the fortunes of scholasticism and medical science in European intellectual life*, Cambridge, 1980.
- BERRIOT-SALVADORE, E., *La Femme en France à la Renaissance*, thèse Saint-Etienne, 1987.
- TELLE, Émile.V., *Déclamation des louenges de mariage*.
- FICIN, *Commentaire sur le Banquet de Platon*, Les Belles Lettres, 1978.
- Antoine HÉROET, *La Parfaicte Amye*, (1542) Exeter U. P., 1981.
- Pernelle du GUILLET *Rymes*, Genève, Droz, 1968.
- SCREECH, M. A., "Querelle des Amyes".
- CASTIGLIONE, *Courtisan*.
- WILSON K. M., Introduction à *Women writers of Renaissance*.

43) CASTIGLIONE, *Courtisan*, pp. 140-141.

44) P. DU GUILLET, *op. cit.* p. 74..

45) WILSON (K.M.), *Introduction à Women writers of Renaissance*, p. XX et p. XXIII.

Woman and knowledge (2)

ABSTRACT

In the introduction of *Women's access to culture* (1598–1715), Linda TIMMERMANS treats “women's access to knowledge in the Renaissance”, from 3 perspectives, that is, (1) feminism and problems of women's access to knowledge, (2) humanism, the Reformation, and women's access to knowledge, and (3) the movement for the education of women ; limits and prospects of the affirmation in 16th century. In the *Bulletin of Faculty of Sociology*, No. 78, I treated the 1st item : (1) feminism and problems of women's access to knowledge, and in this number, I present the 2nd item : (2) humanism and the Reformation, and women's access to knowledge in 3 problems : 1. woman's religious culture, 2. marriage and instruction 3. love and knowledge.

In 〈woman's religious culture〉, the author points out that the evangelical humanists and, a little later, Reformers made a revolutionary appeal, that is, “every person, beyond any age, sex, fortune and social condition, can make access to the Bible, above all, the New Testament, the origin of the teachings of Jesus-Christ”. However, women were prohibited from making sermons in church, and the study of theology by woman was not recommended.

〈Marriage and instruction〉, the author indicates the importance of young women's instructions before marriage in order to ensure their virtuous and happy marriage life.

〈Love and marriage〉, the author says that neo-platonicians of the Renaissance treated the education of women at the view point of love, not of marriage. Male writers considered it as an instrument to improve women's morals, but women writers emphasized study for study's sake, not as a moral object.

Key words : woman, knowledge, education